



Title	『かげろふの日記』上巻と「ものはかなし」
Author(s)	李, 惠遠
Citation	国語国文研究, 124, 17-30
Issue Date	2003-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93711
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_124_17-30.pdf



『かげろふの日記』上巻と「ものはかなし」

李 惠 遠

—

『かげろふの日記』上巻は、序文・跋文と見られる文章を巻頭と巻末に備えている。作者は、その序文において「世中にいとものはかなく、とにもかくにもつかでよにふる人」(上二頁)、「人にもあらぬみのうへ」(同上)という自己認識を示しており、これは、次のとおり跋文でも変らない。

かくとし月はつもれと思ふやうにもあらぬみをしなげうば、こゑあらたまるもよろこほしからず、猶ものはかなきをおもへば、あるかなきかの心ちするかげろふの日記といふべし。

(上二頁 七一頁)

ここで注目したいのは、まず、作者が、自己認識のことばとして「も

のはかなし」という語を用いているということであり、さらに『かげろふの日記』における「ものはかなし」という語の全五例のすべてが、この序文・跋文を含む上巻にのみ集中し、中・下巻には見出されないという事実なのである。その事実には、「ものはかなし」という語が「作者の身の上に関してのみ用いられている」のであり、『かげろふの日記』が作者と兼家との関係を中心につづられたものであるという一般的な理解を援用すれば、「ものはかなし」という語は上巻に記されている作者のあり方、特に兼家との関係における作者のあり方を理解するための重要なキーワードになると思う。

ところが、この「ものはかなし」に対する従来の理解は必ずしも適切なものではなかった。というのも、上巻には「幸福の記録」「愛の記録」がちりばめられているとされ、序文の「世中にいとものはかなく、とにもかくにもつか」ない「人にもあらぬみのうへ」は上巻の内容にそぐわないと理解されて、そのために、「ものはかなし」という語は上巻ではなく兼家と作者との精神的な隔たりが大きくな

り、二人の仲が最も険悪化した時期が描かれる中巻の内容にこそふさわしい、あるいは、「装飾的で実質を伴わない言葉」^(四)と考えられてきたからである。

けれども、本当にこの「ものはかなし」という語は上巻の内容と矛盾するものなのだろうか。「ものはかなし」という語が上巻のみに見られる事実からすれば、「ものはかなし」と上巻の内容とを整合的に理解しようとする試みがあってもよいのではないか。そこで、本稿では、作者が「ものはかなし」と自らを認識する境遇とはいったいどのような境遇であつたのかを確認しながら、それが『かげろふの日記』の上巻の内容とけつして矛盾するものではないことを論証してみたいと思う。

二

従来、「ものはかなし」という語と上巻の内容が齟齬をきたすものと理解されてきた大きな原因は、上巻の内容が作者のいう嘆くべき「人にもあらぬみのうへ」の十分な根拠になっていないという点にあつたようだ。例えば、上村悦子^五氏は作品の内容を年表に置き換え、「作者と兼家との間の愛情生活の実態」を「蜻蛉日記に現れた兼家行状年表」として作成し、その年表から察するに、上巻にあたる十五年間は、町の小路の女の一件など作者が嫉妬と懊悩に苛まれた時期もあるが、一方貴顕との和やかな和歌の贈答や宇治川に兼家の出迎えを受けた初瀬詣での明るい気分なども目につき、全般としてはむしろ「兼家の寵を集め彼の厚遇を受けた幸福な時代であつた」と述

べている。

だが、ここで問題なのは、このように明るい記事の存在にもかかわらず、それらの記事と作者の自己の境遇に対する認識には落差があるのではないかということなのである。具体的に言うと、「兼家の寵を集め彼の厚遇」を受けながらも、作者が自分の境遇を「世中にいともとはかなく、とにもかくにもつか」ない「人にもあらぬみのうへ」と認識せざるを得なかつたのはなぜかという問題になろう。

さて、この問題を考えていく上で参考となるのが、『かげろふの日記』の作者と同じく男から寵愛を受けながらも自らの立場に不安を覚える『源氏物語』の紫上のケースである。まずは、紫上が「世のたとひに言ひ集めたる昔語」の女主人公とは異なる自分の境遇を認識する場面から考えてみよう。

対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな、など思ひつづけて、

(若菜下・四 二二二頁)^(六)

ここで紫上は、「あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる」

昔物語の女主人公たちでさえ「つひによる方」があるのに、自分は「あやしく浮きても過ぐしつるありさま」であるとわが身の寄るべなさを嘆いている。このような認識は『かげろふの日記』の作者が、「世中におほかるふるものがたり」の「よにおほかるそらごと」に対していだいた、自分は「ともかくにもつかで、よにふる人」であるという認識へとつながるものがあるといえよう。

では、紫上にとって、昔物語の女主人公たちとは異なる、「つひによる方」のあり得ない「あやしく浮きても過ぐしつるありさま」とは具体的に何を意味しているのだろうか。ここで注意したいのは、自らを「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身」と悩みつづけてきた紫上との心理的なずれが、紫上を「人よりことなる宿世もありける身」という光源氏を含めた世間一般との間に見られるということである。

「人よりことなる宿世もありける身」という紫上の境遇に対する認識のことばは光源氏の口から発せられたものであったが、それがより具体的に語られるのが、次の場面。光源氏が紫上を相手にわが半生を述懐し、紫上の境涯にふれる個所である。

君の御身には、かの一ふしの別れ（須磨の謫居）より、あなたこなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとなん思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、やむごとなき人といへど、みなかならずやすからぬもの思ひ添ふわざなり。高きまじらひにつけても心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことは

なし。その方は、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや。思ひの外に、この宮（女三宮）のかく渡りものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる心ざしのほどを、御みづからの上なれば、思し知らずやあらむ。もの心も深く知りたまふめれば、さりとともなむ思ふ」と聞こえたまへば、紫の上「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心にしたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」とて、残り多げなるけはひ恥づかしげなり（若菜下・四 二〇六―七頁）

まず、光源氏は、女としての最高位である「后」も、紫上のように「親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきこと」はないし、その点、紫上のような境遇の人こそ「人にすぐれたりける宿世」であると断言している。また、彼女にとって「なま苦しかるべ」きことであろう女三の宮の降嫁も、それによつて自分の「いとど加ふる心ざしのほど」がわかるであろうと言うのである。確かに、世間からみれば、紫上の境遇は源氏という通りかも知れない。しかし、紫上の「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど」ということばには、世間的な幸せでは決して満たされない紫上の立場がうかがわれるのではない。またそのような立場故に紫上本人は「心にしたへぬもの嘆かしさのみうち添ふ境遇におかれたのではなからうか。『ものはかなき身』である紫上が抱えている本質的な問題は、次に示している場面のように、決して光源氏の「心ざしのほど」で決着するような性質の問題ではなかった。

(イ) 対には、かく出で立ちなどしたまふものから、我より上の人や

はあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつづけられて、うちながめたまふ。

(若菜上・四 八八頁)

(ロ) 姫宮(女三の宮)の御事は、帝、御心とどめて思ひきこえたま

ふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。年月経るまに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから、紫の上「今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齡にもなりけり。さりぬべきさまに思しゆるしてよ」とまめやかに聞こえたまふをりをりあるを、

(若菜下・四 一六六〜七頁)

(ハ) 対の上、かく年月にそへて方々にまさりたまふ御おほえに、わ

が身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、さかしきやうにや思さむとつづまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。

(若菜下・四 一七七頁)

(イ)は紫上が女三の宮に対して下手に出た自分を顧みる場面である。正妻として迎えられた女三の宮に対面する際に自分から出向か

なければならぬ自らの立場に直面しながらも、「我より上の人やはあるべき」という自分の地位に対する自負はどう解釈すべきであろうか。この場面は木村佳織氏が「正式に婚儀さへ行つていれば、女三宮に正妻の地位を渡すことなど有り得ず、自分こそが六条院正妻として重んじられていた筈だ、という意識が紫上にこの悲しいばかりの虚勢を張らせた」と指摘しているように、自分と光源氏との結婚への痛恨の意識の反映として理解される場面ではなからうか。このような自分と光源氏との結婚の経緯への痛恨の自覚は、(ロ)の場面のように、帝も「御心」を「とどめて思ひ」、「おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれ」る光源氏の正妻女三の宮も、六条院では紫上の「御勢ひには」勝ることがないのに、また、光源氏と紫上の仲が「いささか飽かぬことなく、隔ても見えな」い状況のさなかで、その「住まひ」を、紫上当人は、「おほぞうの住まひ」と認識し、「かうおほぞうの住まひ」ではなく、出家しての静かな生活を望んでいるところにもあらわれている。たとえ世間からもまた光源氏にも重んじられていたとしても、紫上にとつて光源氏との関係が「制度」によつては保証されない関係から、またそのような関係故に自分の立場に対する負い目から、わずらわしい生活からの逃避として出家を願つたのではなからうか。このような自分の立場に対する負い目は、あれこれにつけて女三の宮の「まさりたまふ御おほえ」に、反転して己の身を思う(ハ)の場面でも明らかによみとれる。つまり、紫上は、「わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど」と、光源氏の愛情を受けている点では自信さえ持っているにもかかわらず、自分の現在の立場を支えている光源氏の愛情がその後も持続す

るという保証はどこにもない、つまり二人の関係が「制度」によって保証されない関係であるという自覚から、その光源氏の「御心ばへもつひにおとろへ」るであろうという不安を覚え、「さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな」と出家を願ったのである。

結局、紫上は光源氏との関係がもつばら光源氏の態度によって左右されるものであり、そのような関係におかれている自分の立場を「ものほかなき身」として認識したのである。さらにこのような自分の立場に対する不安から「心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふ」（若菜下・四・二〇七頁）境遇を強いられたのであるが、紫上は光源氏との関係および自分の立場がもつばら光源氏の態度によって左右されるということが如何に頼りないものであるかはすでに思い知らされていた。光源氏が「前斎院（朝顔、ねんごろに聞こえたまへばなむ、女五の宮（朝顔の叔母）などもよろしく思したなり。似げなからぬ御あはひならむ」（朝顔・二・四七八）といううわさを聞いて、思い悩んでいる次の場面を見てみる。

同じ筋にはものしたまへど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなばはしたなくもあべいかな。年ごろの御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて、人に押し消たれむことなど、人知れず思し嘆かる。かき絶えなごりなきさまにはもてなしたまはずとも、いともものほかなきさまにて見馴れたまへる年ごろの睦び、あなづらはしき方にこそはあらめ、などさまさまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそ、うち怨じなど憎からずきこえたまへ、まめやかにつらしと

思せば、色にも出だしたまはず。（朝顔・二 四七八〜九頁）

いくら光源氏の「年ごろの御もてなしなど」は「立ち並ぶ方」がな⁽¹⁾いとしても、「源氏と朝顔斎院とが結婚すれば、それは正式な結婚となるはずであつて、その時、自分の立場はどうなるか、ということ」を紫上は正確に認識している⁽²⁾場面である。紫上にとつて現在の自分を支えている光源氏の「御心など」が、法的にも守られる正妻になるかも知れない朝顔に「移りなば」、自分は「はしたなくもあべいかな」と自分の立場を思い知らされ、紫上は「いともものほかなきさまにて見馴れたまへる年ごろの睦び」、つまり、自分の現在がもつばら光源氏の愛情に依存するものであるという認識によって、朝顔の一件で、光源氏の自分への処遇が「あなづらはしき方」になり得る致命的な出来事なのだと受けとめる。このように朝顔の一件で抱いた自分の立場に対する不安が、前述したように「後に源氏と女三宮との結婚によつて現実のものとな⁽³⁾ったのではないか。

そもそも、光源氏と紫上との関係はどのようなものであり、この二人の関係において紫上の立場、つまり紫上の妻としての地位はどのようなものであつたのか。この点については、すでに工藤重矩氏の著書⁽⁴⁾に詳しく述べられているが、ここで確認しておきたいのは、光源氏と紫上との関係が愛情のみによつて結ばれている、つまり、「制度」によつて保証されない「非法律的关系」であるということなのだ。

要するに、もつばら光源氏の態度によつて左右される二人の関係において、自分の立場を含めたその関係を支える光源氏の態度が如

何に頼りないものであるかを思い知らされた紫上にとって、光源氏は「つひによる方」になり得なかつたのであり、そのために彼女は自らを「あやしく浮きて過ぐしつるありさま」と認識せざるを得なかつたのである。そして、紫上は、このような関係におかれた自分の立場の負い目を「ものはかなし」という語を用いて表わしているのであり、その負い目から、「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身」（若菜下・四・二一二頁）を強いられていたのであった。

三

光源氏との関係における自分の立場に対する負い目から悩みつづけた紫上自身も「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえ」と、はたから見れば自分に対する光源氏の処遇が分に過ぎるものとして思われるであろうということは承知していた。このような紫上に対する世間からの認識が極端にあらわれているのが次の場面。

紫上が発病して危険な状態に陥つた時に、「（紫上が）亡せたまひにけりといふこと世の中に満ちて、御とぶらひに聞こえたまふ人々」もあるという場面である。

かく、亡せたまひにけりといふこと世の中に満ちて、御とぶらひに聞こえたまふ人々あるをいとめゆしく思す。今日のかへさ見に出でたまひける上達部など、帰りたまふ道に、かく人の申せば、「いといみじきことにもあるかな。生けるかひありつる幸

ひ人の光うしなふ日にて、雨はそぼ降るなりけり」と、うちつけ言したまふ人もあり。また、「かく足らひぬる人はかならずえ長からぬことなり。『何を桜に』という古言もあるは。かかる人のいとど世にながらへて、世の樂しびを尽くさば、かたはらの人苦しからん。今こそ、二品の宮は、もとの御おぼえあらはれたまはめ。いとほしげにおされたりつる御おぼえを」など、うちささめきけり。

（若菜下・四 二三八頁）

これによれば、上達部たちの紫上に対する評価は、「生けるかひありつる幸ひ人」で、「かく足らひぬる人」であり、「かかる人のいとど世にながらへて、世の樂しびを尽くさば、かたはらの人（女三の宮）苦しからん」とまでいう。しかし、光源氏との関係における自分の立場に対する負い目は紫上に常につきまとつていたのであつて、それ故、紫上は悩みつづけたのである。そしてこの世間の評価は、第二節で述べたように、「人にすぐれたりける宿世」という光源氏のそれと何ら変るところはなく、そこには紫上の認識との大きな落差が認められるのである。このずれを解く鍵は、「幸ひ人」ということばがもつている意味にあり、結論をいえば、それは次のように工藤重矩氏が説く通りであると思う。

「幸ひ人」という言葉は、紫の上、明石母娘、中の君、浮舟など不遇な境遇の女性が、本来あるべき状態以上の幸運をつかんだ者について使われている。結婚の仕方もみな正妻ではない。明石の君はやや事情が異なるが、他は両親あるいは保護者たるべ

き男親がいらない、いても保護者の義務を放棄している。本来なら望み得べくもないものを得たので「幸ひ人（幸運者）」と呼ばれたのである。

つまり、紫上は、あくまでも「本来なら望み得べくもないもの」である光源氏との関係において、「幸ひ人」と世間から考えられるのであって、そうした評価は紫上自身の自己認識とは当然のようにずれを見せることになるわけである。実際、「幸ひ人」と呼ばれている紫上、明石の君、中の君などの女たちが「ものほかなし」という語を用いて自分の立場に対する負い目から悩む記述が見られるのは「幸ひ人」が「世間の評価であり、当人の内心の思いには関係なく、幸運に恵まれて思いがけず世俗の榮耀を得た者に与えられる、羨望と蔑視のないまぜにされた言葉」という「幸ひ人」という語がもつ「幸ひ人」の内面の苦悩と外面のめでたさとの齟齬」のあらわれでもあらう。

四

さて、話を『かげろふの日記』に戻すと、作者の「ものほかなし」という不安も紫上のケースと同様に考えることができるのではなからうか。つまり、作者にとつて兼家との関係が「制度」に保証されることがなく、もっぱら兼家の態度によって左右されるというその頼りなさから、その関係におかれて自分の立場に対する負い目を「ものほかなし」という語を用いて示したのではないかというこ

とである。そこで、相手との関係が「制度」に保証されることがないために「ものほかなき身」と自分の境遇を認識せざるをえない女達の、相手の男との関係のあり方がよく示されている次の場面から見ていくことにする。

心のどかにくらす日、はかなきこといひくのはてに、われも人もあしういひなりて、うち怨じていづるになりぬ。はしのかたにあゆみいで、をさなき人をよびいで、「われはいまはこじとす」などいひおきていでにけるすなはち、はひりて、おどろ／＼うなく。「こはなぞ、／＼」といへど、いらへもせて、ろんなうさやうにぞあらんとおしはかるれど、人のきかむもうたてものぐるほしければ、とひさして、とかうこしらへてあるに、五六日ばかりになりぬるに、おとせす。れいならぬほどになりぬれば、あなもののぐるほし、たはぶれごととこそわれはおもひしか、はかなきかなればかくてやむやうもありなにかしとおもへば、心ぼそうてながむるほどに、いでしひつかひしゆするつきのみづは、さながらありけり。うへにちりみてあり。かくまでとあさましう、

たえぬるかかげだにあらばとふべきをかたみのみづはみくさみにけり

などおもひしひしも、見えたり。れいのごとにてやみにけり。かやうにむねつぶらはしきをりのみあるが、世に心ゆるびなきなん、わびしかりける。

（康保三年八月）（へ上）五三頁

作者にとって兼家との関係が「制度」に保証されることがなく、もっぱら兼家の態度によつて左右されるという関係であるために、必然的に生じざるをえない日常の一コマでもあるが、この二人の関係のあり方から、作者は「むねつぶらはしきをりのみあるが、世に心ゆるびなきなん、わびしかりける」境遇を強いられるのである。なぜなら、兼家との関係は、右の場面のように、兼家が「われはいまはこじとす」といえば、そのまま断たれるような関係であり、いくら作者が兼家のそのことばを「たはぶれごと」と思つても、兼家から消息もなく、訪れも「れいならぬほど」になれば、兼家との関係は「はかなきなか」であるが故に、そのまま「やむやうも」ありえるためである。そして、そのまま関係が断たれても、作者の方からは、何一つできることはない。いうまでもなく、「制度」に保証されない「はかなきなか」である二人の関係において、兼家の自分の所への訪れが「たえ」ては「とふべき」「かげだに」ないためである。この折の危機は「れいのごとにてやみにけり」と回避されることになるが、この二人の関係が「制度」に保証されない関係である限り、また、そのような関係がつづく限り、同じような危機を迎える可能性は常にあった。このような作者と兼家との関係のあり方からは、作者にとって兼家を「つひによる方」として望むのはそもそも無理ではなからうか。

実際、二人の関係を左右する「ひと（兼家）のこゝろ」（天曆十年五月）（上十二頁）が「おもはずなる」（同上）ということ、つまり、兼家に新しい女ができるというような事件は、次の場面のように、作者と兼家との関係に重大な影響を及ぼし、また、自分の立場

を支える「ひとのこゝろ」が如何に頼りないものであるかを思い知らされるきっかけになる。

かくてたえたるほど、わがいへは内裏よりまゐりまかづるみちにしもあれば、よ中あか月とうちしはぶきてうちわたるも、きかじとおもへども、うちとけたるいもねられず。よながうしてねぶることなければ、さなゝりとみきく心ちはなにゝかはにたる。いまはいかでみきかずだにありにしがなとおもふに、むかしすぎこせし人も、「いまはおはせずとか」など、人につきてきこえごつをきくをものしうのみおぼゆれば、日くるればかなしうのみおぼゆ（天曆十年七月八月）（上十四～十五頁）

この場面はいわゆる「前渡り」の場面であるが、兼家との関係が断たれる可能性をはらんだ新しい女の出現によつて、作者は、兼家との関係における自分の不安定な立場を思い知らされただけではなく、「素通り」という「救いようのない露骨で惨めな屈辱」を味わわなければならなかったのである。

このような「制度」によつて保証されない関係がどのくらいはかないものであったかは、「むかしすぎこせし人」の行動からもうかがうことができる。この「むかしすぎこせし人」とは、「兼家との結婚を境として、それ以前に道綱母に言い寄っていた男」であつて、その男が、「いまはおはせずとか」と、兼家が通つていないことを知り、人を介して「何らかの意図のもとに道綱母の耳へ届くようしむけられた言語行動」をとつたのであるが、その「意図」とは

いつたい何であらうか。その「意図」が、兼家が通つてこなくなつた今、彼に代わつて作者のもとに通えるのではないかとの魂胆であつたことは明白だらう。しかし、このような「むかしすぎごとせし人」の行動に対しても作者は何の抗議もできず、「ものしうのみおぼゆ」るしかなかった。というのは、そもそも兼家と作者との関係は「制度」に保証されない故に、ただ兼家が通わなくなるだけで他の男が通つてもかまわないくらい関係であつたためである。

この事件を含む苦悩に満ちた叙述は作者が「兼家の百パーセントの愛情を要求した」ことに起因するとまでいわれている。しかし、もつぱら兼家の愛情によつて左右される関係において、兼家の愛情が記されるのは当然であらうし、二人の関係を左右してきた兼家の愛情が他の女に移るという問題に直面した作者の苦悩は、「兼家の百パーセントの愛情を要求した」ということだけですまされる問題ではないだらう。なぜなら、兼家の愛情が他の女に移ることは作者との関係がそのまま断たれることを意味したからだ。この町の小路の女の事件をきっかけに作者は自分と兼家との関係がもつぱら兼家の態度に左右されるものであり、また、二人の関係がもつぱら兼家の態度に支えられるということが如何に頼りないものであるかを思い知らされた。実際に、作者が兼家との関係における自分の立場に対して自問することばが増え、作者自らの境遇に対して「ものほかなし」という語を用いて嘆く記述があらわれるのもこの事件の後であり、この事件が作者の自らの立場に対する自覚をもたらしたといえよう。

五

前節で述べたように、町の小路の女の一件で、作者は、もつぱら兼家の態度によつて左右される二人の関係における自身の立場を思い知らされ、この事件以降、作者が自らの境遇を自問する記述が増えるのであるが、そのような作者の自分の境遇に対する認識がうかがえる記述についてみていく。

次にあげるのは、序文の「ものはかなし」以降はじめて記される「ものはかなし」を含む記事である。

かくてなでふことなければ、人のこゝろをなほたゆみなくころみたり。つきよのころよからぬものがたりして、あはれなるさまのことゝもかたらひてもありしころ、おもひいでられて、ものしければ、かくいはる。

くもりよの月とわがみのゆくすゑのおぼつかなさはいづれまされり

かへりごと、たはぶれのやうに、

おしはかる月ほにしへぞゆくさはわれのみこそはしるべかりけれ

など、たのもしげにみゆれど、わがいへとおぼしき所はことになんあんめれば、いとおもはずにのみぞよはありける。さいはひある人のためには、とし月みし人もあまたのこなどもたらぬを、かくものはかなくて、おもふことのみしげし。

(康保元年夏) (上) 三五頁

応和二年五月の司召で、兼家は「いとねちけたるものゝ大輔」(同上二八頁)などといわれる兵部大輔に任じられ、「世中をいとうとましげ」(同上)に思つた彼は出仕も怠り、「いとどのどかにて二三日など」(同上)作者のもとで過ごす。そして、兼家との関係によつてのみ関わるのでできる人物である兵部卿宮章明親王と、二人で組んだ遊戯的な和歌の贈答を取り交わす。その一方で、「日ごろなやましうてしはぶきなどいたうせらるゝを、ものゝけにやあらん」(同上三二頁)という事で作者は兼家に連れられ「れいもものする山でらへのは」(同上)り、そこで盆の供物を頭に乘せたり担つたりする「あやしきさまに」(同上)「もろともにみてあはれがりもわらひもす」(同上)るといふ愛情に満ちた場面がこれに先立つて描かれているのだが、従来、ここに引いた記事とそのような幸福を描く記事との間には断層が見られると受け止められてきた。例えば、伊牟田経久氏は、そのような断層について次のように述べている。

兵部卿の宮をめぐる記事に表われたような明るく平穏な日々は、上巻全体の中では全く特異なものであり、そのままでは、「かげろふの如くはかなき身の上の記」にふさわぬものなのである。したがって、これを上巻の一部分として位置づけ、その明るく平穏な日々のもつ意義と背景とを正しくあらわすためには、構成上の工夫が必要となる。

氏はいわゆる「幸福の記録」「愛の記録」といわれる記事が「『かげろふの如くはかなき身の上の記』にふさわぬもの」であり、そのために右に引用した記事を「構成上の工夫」としての「つなぎ(関連づけ)の役割を果たす」ものとしている。しかし、そのように構成上の要求として片付けるのではなく、「幸福の記録」「愛の記録」といわれる記事に示されているような兼家の愛情にもかかわらず、なぜ、作者は兼家との関係に不安を感じしかなかったのか、その内実を明らかにする必要があるのではないか。そこで、このような観点からあらためてこの記事を見てみることにする。

前述したように、町の小路の女の件で、作者は兼家との関係がもつばら兼家の態度によつて左右される関係であることがいかに頼りないものであるかを思い知らされた。たとえ町の小路の女が兼家の寵を失うことで、町の小路の女の件が一段落したとしても、次の叙述のように、作者と兼家の関係が兼家の態度によつて左右される関係であるということは変らなかつた。

わがおもふにはいますこしうちまさりてなげくらんと思ふに、いまぞむねはあきたる。いまぞれいのところにうちらはらひてなごきく。されどこゝにはれいのほどにぞかよふめれば、ともすればこゝろづきなうのみおもふほかに、(中略)めざましと思ひしところは、いまは天下のわざをしさわぐときけば、心やすし。むかしよりのことをばいかゞはせん、たへがたくともわがすぐせのおこたりにこそあめれなど、心をちぢにおもひなしつゝありふるほどに

(年次不明) (上) 二二～二八頁

町の小路の女の件が一段落したとしても、兼家が帰るところは「れいのところ（時姫）」であって、作者のところは「れいのほかにぞかよふ」という。しかし、このような現実を作者は自分の「すくせのおこたり」としてどうしようもないこととして認める。なぜなら、作者にとって「むかしよりのこと」つまり、時姫が自分より先に正妻として結婚したことはどうしようもないことであるためである。

このような認識が康保元年夏の記事の「わがいへとおぼしき所はこれになんあんめれば」という記述に反映されているのではなからうか。このように自分の立場に対する明確な認識をもっている作者が、今、「わがみのゆくすゑ」の「おぼつかなさ」を訴え、兼家は「ゆくさきはわれのみこそはしるべかりけれ」と返しているが、このような兼家の態度がいかに「たのもしげに見えたとしても、兼家にとって「わがいへとおぼしき所」が作者のところでないかぎり、作者は「おもはずにのみぞよはありける」現実には直面せざるをえなかったのではなからうか。

康保元年夏の記事において問題なのは、「さいはひある人」のためには以下の解釈である。この部分の解釈をめぐっては諸説あり、その紹介については工藤氏の「『かげろふ日記』「さいはひある人」のためには」の解釈——運不運をめぐる道綱母の嘆き——にゆずることとするが、まず氏の試訳を示すことにする。

運に恵まれた人（時姫）に対しては長年世話をした人（兼家）も、（私は時姫と違って運に恵まれず）たくさんの子など持つていないので、（兼家に見捨てられ）このように頼りない状態で悩

むことばかり多い。

氏は「年月見し人」はおのずから男」という想定から、「とし月みし人」を兼家とし、「とし月みし人」が兼家だから、「さいはひある人」は一般的な漠然として対象ではなく、具体的な人物、つまり、兼家が長年世話をした人である時姫としているが、まず、氏が「年月見し人」はおのずから男」という想定が疑問である。特にここは男でも女でもかまわないのではなからうか。また、氏の試訳をみても、「長年世話をした人（兼家）」の「も」が文脈上どこにかかってくるのかはつきりしない。すると、「とし月みし人」を兼家と考えるのには無理があるのではないか。そうすると、「さいはひある人」を「時姫」と限定していく必要もなくなるのではないだろうか。

一方、「とし月みし人」が兼家ではないとすると誰であるかと考える時、それ以下の内容からみると「とし月みし人」は作者以外には考えられない。では、作者は「とし月みし人」も以下の内容をどうして「さいはひある人」に対象させて述べているのか。町の小路の女の件にして、「制度」に保証されない関係であり、また、道綱しかない作者が、康保元年の時点で十年ほどの間も、兼家との関係を持續させているということは見方によっては運に恵まれているともいえる。作者がこのような現実を認識しているかどうかは文脈上にははつきりあらわれていないが、自分の立場の負い目から悩みつづけた紫上の「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえ」ということばにこめられた意識から考えると、このような意識が皆無とはいえないであろう。このような意識が「とし月みし人」の「も」

に反映されているのではなからうか。「さいはひ」ということばは工藤氏が説くように「羨望と蔑視のないまぜにされた言葉」である。

兼家との関係を左右する兼家の愛情の限界、また、二人の関係がいつでも断たれる可能性のあることを思い知ったにもかかわらず、もうすでに十年ほども関係を持続させてきた作者にとって、せめて兼家との関係を持続させるための手段として「あまたのこなど」さえ持つていれば、自分と兼家との関係にある程度安定をもたらすであらうのという「さいはひ人」に対しての「羨望」の意識があつたのではないだらうか。つまり、「とし月みし人も」以下の内容は、「あまたのこなど」もなく、頼りない兼家の愛情だけをよりどころとしている自分の境遇を述べていたのであらう。

作者の自分の境遇に対する嘆きは兼家との関係のあり方から生じたものであるが、作者にとつては、兼家との関係が「本来なら望み得べくもない」関係であることがその最大の要因であつたのだから。次に引用する場面は、作者がそのことを強く認識していることを示している。

けふのひるつかたよりあめいといたうはらめきて、あはれにつれぐとふる。まして、もしやと思ふべきこともたえにたり。いにしへをおもへば、我ためにしもあらじ、心の本上にやありけん。あめ風にもさはらぬ物とならはしたりし物を、けふおもひいづれば、むかしも心のゆるぶやうにもなかりしかば、我心のおほけなきにこそありけれ。あはれ、さはらぬものとみし物を、それましておもひかけられぬ、とながめくらさる。

(天禄元年十二月) (中) 四九頁

兼家の訪れが途絶える場面であるが、作者はここで兼家の「あめ風にもさはらぬ物とならはした」「いにしへ」の態度を、「我心のおほけなきにこそ」と感じている。このような作者の受けとめ方は、兼家と自分との関係が「本来なら望み得べくもないもの」であつたとの自覚を意味しているであらう。このように「本来なら望み得べくもない」兼家との関係の中で作者は一応は「さいはひある人」になる可能性があつたにもかかわらず、その機会を逃してしまう。このような意識が「きはめてさいはひなかりける身(天禄二年四月)」という自分の境遇の認識へつながるのではなからうか。

六

以上のように、『かげろふの日記』の作者は、自分と兼家との関係が、もつぱら兼家の態度によつて左右されるものであるということを受けとめ、兼家は自分にとつて「つひによる方」になりえない存在でしかないことを認識した結果、「いとものはかなく、ともかくにもつかでよにふる」境遇であるとの自己認識に到達しているのである。そして、このような自分の境遇に対する認識から、自分の「存在の根拠のなさを喩える比喩」(三)として「あるかなきかの心ちするかげろふ」という表現を用いたのであつた。たとえ、愛情に満ちた場面が描きだされていても、作者には常に自分の立場に対する不安がつきまとつていたのである。「幸福の記録」「愛の記録」という点が強調

され、作者のそのような不安が軽視された結果、従来「ものはかなし」が上巻の記事とはかならずしもうまく噛み合わず、取って付けたような使われ方をしている^(三)という理解がなされてきたのではなからうか。このような見方は、まさに「幸ひ人」をめぐる当時の世間の評価の視点から作者のような境遇の女の幸せをはかろうとした結果ともいえるのではないか。

『かげろふの日記』の上巻単独成立説は、本文の記述と史実との相違点を詳細に検討することにより、上巻と中巻が別々に成立したと考え得るところから始まった^(三)。その後の研究によって、記述の精粗や回想から日次への移行という点からも上巻と中巻の間に断層が認められ、現在では上巻単独成立説が主流となってきた。にもかかわらず、従来、上巻の序、跋に記されている内容は、主に中巻の内容にあたるというように考えられることが多かった。特に「ものはかなし」という語は、第一節で述べたように、上巻の内容と矛盾していると見なされ、中巻の内容と関連づけて理解されてきた。しかし、これまで検討してきたように、「ものはかなし」という語は、作者の境遇を示す言葉として、上巻の内容と決して矛盾してはいなかったたのであり、むしろ、上巻の内容を理解する上で、作者の境遇を表すことばとして極めて重要なものであったというべきではないか。

注

(一) 『かげろふの日記』の本文については、『桂宮本蜻蛉日記』へ上

(中)〈下〉(笠間書院、一九八二年)を底本とし、上村悦子『蜻蛉日記 校本・書入・諸本の研究』(古典文庫、一九六三年)や諸注釈書を参考に、私に校訂したものを用いた。なお、頁数は底本のものである。

(二) 伊牟田経久『「かげろふ日記」上巻の表現と構成』(『言語と文芸』四〇、一九六五年五月、後に日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 平安朝日記Ⅰ』、(有精堂出版、一九七四年)に再録)

(三) 清水好子『日記文学の文体』(『解釈と鑑賞』一九六一年二月、後に深沢徹編『日記文学研究資料新集』3 かげろふ日記 回想と書くこと、有精堂、一九八七年)に再録)

(四) 今西祐一郎『ものはかなし』の系譜——『蜻蛉』から『源氏』へ——(鈴木日出男編『文学史上の『源氏物語』』、至文堂、一九九八年六月)

(五) 上村悦子『蜻蛉日記の一研究——兼家の行状を中心に——』(『日本女子大学紀要(文学部)』四、一九五五年二月)

(六) 『源氏物語』本文は新編日本古典文学全集(小学館)により、頁数もそれによった。

(七) 「紫上の妻としての地位——呼称と寝殿居住の問題をめぐる——」(『中古文学』五二、一九九三年十一月)

(八) 本稿において「制度」という用語は「法律の規制を中心とした婚姻にかかわる社会的きまり」(工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』(風間書房、一九九四年二月)二〇頁、平安朝貴族の結婚と源氏物語——辻本裕成の批判に答えて——(福岡

教育大学「国語科研究論集」四三、二〇〇二年一月の意として用いた、

- (九) 工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』（風間書房、一九九四年二月）六九頁

- (一〇) 注（九）六九頁

- (一一) 注（九）六〇～一二〇頁

- (一二) 工藤重矩「源氏物語の個人・家族・社会——「さいはひ」「さいはひ人」をめぐる——」（『源氏物語研究集成 第六巻 源氏物語の思想』、風間書房、二〇〇一年六月）

- (一三) 今井源衛「前渡り」について——源氏物語まで」（『中古文学』十七、一九七六年五月、後に、『紫林照徑——源氏物語の新研究——』（角川書店、一九七九年十一月）に再録）

- (一四) 今西祐一郎「『蜻蛉日記』注釈余滴（二）」（『文献探求』二二、一九八八年九月）

- (一五) 注（四）論文

- (一六) 注（五）論文

- (一七) 注（二）論文

- (一八) 「むかしよりのこと」について、たいていの注釈書が「昔から思わしくいかなない兼家との関係。主として『蜻蛉日記』執筆時の作者の感慨に基づく」（『新全集』頭注）の意味として解しているが、ここでは時姫が自分より先に正妻として結婚したことをさす意味であると思う。なぜなら、本稿で述べているように作者の嘆きはもっぱら兼家との関係のあり方から生じたものであるためである。なお、作者の「妾としてのありよう」につい

ては注（九）四一～四五頁を参照されたい。

- (一九) 『福岡教育大学紀要』四八、一九九九年二月

- (二〇) 新聞「美「平安朝文学における「かげろふ」について——その仏教的背景——」（紫式部学会編『源氏物語と日記文学 研究と資料——古代文学論叢 第十二輯——』、武蔵野書院、一九九二年二月）

- (二一) 注（四）論文

- (二二) 藤本俊枝「蜻蛉日記の成立時期について」（『平安文学研究』二五、一九六〇年十一月）

- (二三) 川嶋明子「蜻蛉日記における不幸の変容——成立を探る一つの手がかり——」（『国語国文研究』三三、一九六六年三月）、古賀典子「『蜻蛉日記』上巻の成立に関する私論」（『語文研究』二五、一九六八年三月）、守屋省吾「蜻蛉日記形成論」（笠間書院、一九七五年九月）など

（イ）ハイウオン・北海道大学大学院博士課程）